

夏目漱石

カーライル博物館





# カーライル博物館



公園の片隅かたすみに通かり掛がかりの人を相手に演説をしてい  
 者がある。向むこうから来た釜形かまがたの尖とがった帽子を被かずいて古ぼ  
 けた外套がいとうを猫背ねこぜに着た爺じいさんがそこへ歩みを佇とどめて演説  
 者を見る。演説者はぴたりと演説をやめてつかつかとこ  
 の村夫子そんぷうしのたたずめる前まへに出て来る。二人ふたりの視線がひた  
 と行き当ゆる。演説者は濁りたる田舎調子いなかじょうしにて御前はカー  
 ライルじゃないかと問う。いかにもわしはカーライルじ  
 やと村夫子が答える。チエルシーの哲人セージと人が言い囃はやすの

は御前の事かと問う。なるほど世間ではわしの事をチエ  
ルシーの哲人と言うようじゃ。セージというは鳥の名だ  
に、人間のセージとは珍らしいなと演説者はからからと  
笑う。村夫子はなるほど猫ねこも杓子しゃくしも同じ人間じやのにこ  
とさらに哲人などと異名いみようをつけるのは、あれは鳥じやと  
渾名あだなすると同じようなものだのう。人間はやはり当り前あたまえ  
の人間で善よかりそうなものだのに。と答えてこれも  
からからと笑う。

余よは晚餐ばんさんまえに公園を散歩するたびに川縁かわべりの椅子いすに腰  
を卸おろして向側むこうがわを眺ながめる。ロンドンに固有なる濃霧はこ

とに岸辺きしべに多い。余が桜の杖に頤あごを支さえて真正面を見て  
 いると、はるかに対岸の往来を這はい回る霧の影は次第に  
 濃こくなつて五階立かいだての町続つきの下から漸々ぜんぜんこの揺曳たなびくもの  
 の裏うちに薄れ去つて来る。仕舞しまいには遠き未来の世を眼前に  
 引き出いだしたるようように窈然ようぜんたる空の中に取り留とめのつかぬ  
 鳶色とびいろの影が残る。その時この鳶色の奥にぼたりぼたりと  
 鈍ひかき光りが滴したたるようように見えるはじめる。三層四層五層と  
 もに瓦斯ガスを点じたのである。余は桜の杖をついて下宿の  
 方へ帰る。帰る時必ずカーライルと演説使いの話を思い  
 だす。かの溟濛めいもうたる瓦斯の霧に混まざる所が往時この村夫

子の住んでおったチエルシーなのである。

カーライルはおらぬ。演説者も死んだであろう。しかしチエルシーは以前のごとく存在している。いな彼の多年住み古した家屋敷さえ今なお儼然げんぜんと保存せられてある。千七百八年チエイン・ロウができてより以来幾多の主人を迎え幾多の主人を送ったかはしらぬが、とにかく今日まで昔のままに残っている。カーライルの歿後は有志家の発起ほつきで彼の生前使用したる器物調度図書典籍を蒐あつめてこれを各室に按排あんばいし好事こうずのものにはいつでも縦覧せしむる便宜さえ謀はかられた。



文学者でチエルシーに縁故のあるものを挙あげると昔しはトマス・モア、下くだつてスモレット、なお下くだつてカーライルと同時代にはリ・ハントなどがもつとも著名である。ハントの家はカーライルのじき近傍で、現にカーライルがこの家に引き移った晩尋ねて来たということがカーライルの記録に書いてある。またハントがカーライルの細君にシエレーの塑そぞう像を贈ったということも知れている。このほかにエリオットのおった家とロセツチの住んだ邸やしきがすぐ傍そばの川端かわばたに向いた通りにある。しかしこれ等らはみなすでに代だいがかわって現に人がはいつているから見

物はできぬ。ただカーライルの旧廬きゆうろうのみは六ペンスを払えばなんぴとでもまたなんどきでも随意に観覧ができる。

チエイン・ローは河岸端かしのぼたの往来を南に折れる小路でカーライルの家はその右側の中ごろあに在る。番地は二十四番地だ。

毎日のように川を隔てて霧の中にチエルシーを眺めた余はある朝ついに橋を渡ってその有名なる庵いおりを叩たたいた。

庵りというものさと物寂びた感じがある。少なくとも瀟洒しょうしや

とか風流とかいう念を伴う。しかしカーライルの庵いおりはそんな脂やにっこい華奢きゃしゃなものではない。往来からただちに戸がたた叩けるほどの道傍みちばたに建てられた四階造づくりの真四角まっしかくな家である。

出張でばった所も引き込んだ所もないのべつに真直まっすぐに立っている。まるで大製造場だいせいぞうばの烟突えんとつの根本を切ってきてこれに天井を張って窓をつけたようにみえる。

これが彼が北の田舎からはじめてロンドンへ出て来て探さがしに探し抜いてようようのことで探し宛あてた家である。彼は西を探し南を探しハンプステッドの北まで探し

てついに恰好かつこうの家を探し出すことができず、最後にチエイン・ローへ来てこの家を見てもまだすぐに取り極とりきめるほどの勇氣はなかつたのである。四千万の愚物と天下を罵ののしった彼も住家すみかには閉口したとみえて、その愚物の中に当然勘定せらるべき妻君へ向けて委細を報知してその意向を確たしかめた。細君の答に「御申越おんまをしこしの借家は二軒共不都合もなきやう存ぜられ候まうらひへば私ロンドンへ上り候まうらひまで双方さうほうとも御明おあけおき願ねがひたく若もしましたそれまでに取り極きめ候まうらひ必要相生そろじ候節そろは御一存おとりはかにていかがとも御取計おとりはからひ下されたく候まうらひ」とあつた。カーライルは書物のうえでこ

そ自分独りひとわかたつたような事をいうが、家を極めるには  
 細君の助けに依よらなくては駄目だめと覚悟をしたものとみえ  
 て、夫人の上京するまで手を束ねつかて待っていた。四五日しごんち  
 すると夫人が来る。そこで今度は二人ふたりしてまた東西南北  
 を馳かけ回った揚句あげくの果はてやはりチエイン・ローが善いいとい  
 うことになった。両人ふたりがここに引き越したのは千八百三  
 十四年の六月十日で、引越ひっこしの途中に下女の持っていたカ  
 ナリヤが籠かごの中で嘔さえずつたといふことまで知れている。  
 夫人がこの家を撰えらんだのは大いに気に入ったものかほか  
 に相当なのがなくて已やむを得えなんだのか、いずれにもせよ

この烟突のごとく四角な家は年に三百五十円の家賃をも  
つてこの新世帯しんじよたいの夫婦を迎えたのである。カーライルは  
このクロムウエルのごときフレデリック大王だいおうのごときま  
た製造場の烟突のごとき家の中でクロムウエルを著わし  
フレデリック大王を著わしデイスレリーの周旋にかかる  
年給を擯しりぞけて四角四面に暮したのである。

余は今この四角な家の石階の上に立って鬼の面のノツ  
カーをコツコツと敲たたく。しばらくすると内から五十恰好  
の肥ふとった婆ばあさんが出て来ておはいりと言う。最初から見  
物人と思っっているらしい。婆さんはやがて名簿のような

ものを出してお名前なまえをという。余はロンドン滞留中よ四たびこの家に入り四たびこの名簿に余が名を記録した覚えがある。この時は実に余の名の記入はじめ初であつた。なるべく丁寧ていねいに書くつもりであつたが例によつてはなはだ見苦しい字ができ上つた。まえのほうを繰くりひろげて見ると日本人にほんじんの姓名は一人ひとりもない。してみると日本人でここへ来たのは余がはじめてだくだと下らぬことが嬉うれしく感ぜられる。婆さんがこちらへと言うから左手の戸をあけて町に向いた部屋へやにはいる。これは昔客間であつたそうだ。いろいろなものものが並べてある。壁に画えやら写真やらがあ

る。たいがいはカーライル夫婦の肖像のようだ。後ろの部屋にカーライルの意匠に成ったという書棚しよだながある。それに書物がたくさん詰まっている。むずかしい本がある。下くだらぬ本がある。古びた本がある。読めそうもない本がある。そのほかにカーライルの八十の誕生日の記念のためにい鑄たという銀牌ぎんぱいと銅牌どうぱいがある。金牌きんぱいは一つもなかったようだ。すべての牌と名のつくものがむやみにかちかちしていつまでも平気に残っているのを、もろろた者の烟けむりのごとき寿命と対照して考えると妙な感じがする。それから二階へ上あがる。ここにまた大きな本棚が有



って本が例のごとくいっぱい詰まっている。やはり読め  
そうもない本、聞いたことのなさそうな本、いりそうも  
ない本が多い。勘定をしたら百三十五部あった。この部  
屋も一時は客間になっておったそうだ。ビスマークがカ  
ーライルに送った手紙とプロシアの勲章がある。フレデ  
リック大王伝のお蔭かげとみえる。細君の用いた寝台ねだいがある。  
すこぶる不器用ぶきような飾りかざり気けのないものである。

案内者はいずれの国でも同じものと見える。さつきか  
ら婆さんは室内の絵画器具について一々説明を与える。  
五十年間案内者を専門に修業したものであるまいが非

常に熟練したものである。何年何月何日にどうしたこう  
したとあたかも口から出任せに喋舌しゃべっているようであ  
る。しかもその流暢りゆうちやうな弁舌に抑揚があり節奏がある。  
調子が面白いおもしろからそのほうばかり聴きいているとなにを言  
っているのか分らなくなる。はじめのうちには聞き返した  
り問い返したりしてみたが仕舞には面倒めんどうになったからお  
前はお前でかってに口上を述べなさい、わしはわしで自  
由に見物するからという態度をとった。婆さんは人が聞  
こうが聞くまいが口上だけは必ず述べますというふうで  
べつだん厭あきた景色もなく怠る様子もなく何年何月何日

をやっている。

余は東側の窓から首を出してちよつと近所を見渡した。眼の下に十坪とつぽほどの庭がある。右も左もまた向うも石の高塀たかべいで仕切られてその形はやはり四角である。四角はどこまでもこの家の付属物かと思う。カーライルの顔は決して四角ではなかった。彼はむしろ懸崖けんがいの中途が陥落して草原くさはらの上に伏しかかったような容貌ようぼうであった。細君は上出来じょうできの辣蕪らつきよのように見受けらるる。今余の案内をしている婆さんはあんばんのごとく丸まるい。余が婆さんの顔を見てなるほど丸いなと思うとき婆さんはまた何年

何月何日を誦じゆしだした。余は再び窓から首を出した。

カーライル言う。裏の窓より見渡せば見ゆるものは茂る葉の木株、碧みどりなる野原、およびそのあいだに点綴てんてつする勾配こうばいの急なる赤き屋根のみ。西風にしかせの吹くこのごろの眺ながめはいと晴れやかに心地こゝちよし。

余は茂る葉を見ようと思ひ、青き野を眺めようと思つて実は裏の窓から首を出したのである。首はすでに二返へんばかり出したが青いものもなんにも見えぬ。右に家が見える。左りに家が見える。向むこうにも家が見える。その上には鉛色の空が一面に胃病やみのように不精無精ぶしやうぶしやうに垂たれ

かかっているのみである。余は首を縮めて窓より中へ引き込めた。案内者はまだ何年何月何日の続きを朗らかに読誦どくじゆしている。

カーライルまた言うロンドンの方かたを見れば目に入るものはウエストミンスター・アベ―とセント・ポールズの高塔の頂いただきのみ。その他まほろし幻のごとき殿宇は煤すすを含む雲の影の去るに任せて隠見す。

「ロンドンの方」とはすでに時代後おくれの話である。今日チエルシーに来てロンドンの方を見るのは家の中うちに坐すわって家の方かたを見ると同じ理窟で、自分の目で自分の見当

を眺めるといふのと大した差違はない。しかしカーライルはみずからロンドンに住んでいゝとは思わなかつたのである。彼は田舎に閑居して都の中央にある大伽藍だいがらんをはるかに眺めたつもりであつた。余は三度みび首たを出した。そして彼のいわゆる「ロンドンの方」へと視線を延ばした。しかしウエストミンスターも見えぬ、セント・ポールズも見えぬ。数万の家、数十万の人、数百万の物音は余と堂宇との間に立ちつつある、ただよ漾たいつつある、動きつつある。千八百三十四年のチェルシーと今日のチェルシーとはまるで別物である。余はまた首を引き込めた。

婆さんは默然もくねんとして余の背後ちよりつに佇立ちよりつしている。

三階あがに上る。部屋の隅すみを見ると冷やかひやかにカーライルの

寝台ねだいが横よこたわっている。青き戸帳とばりが物静かに垂たれて空むなし

き臥床ふしどの裡うちは寂然せきぜんとして薄暗い。木はなんの木か知らぬ

が細工はただ無器用そぼくで素朴であるというほかになんらの

特色もない。その上に身を横えた人の身の上も思い合わ

さるる。傍かたわらには彼が平生使用した風呂桶ふろおけが九鼎きゅうていのご

とく尊とうとげに置かれてある。

風呂桶とはいうもののバケツの大きいものにすぎぬ。

彼がこの大鍋おおなべの中でロンドンの煤すすを洗い落したかと思う

とますますその人となりが惚しのばれる。ふと首あを上げると壁の上に彼おうじようが往生した時に取ったという漆喰しっくいせい製の面型マスクがある。この顔だなと思う。この炬燵こたつやぐら檜こたつやぐらぐらいの高さの風呂に入はいってこの質素な寝台の上に寝て四十年間八釜やかまし敷い小言を吐き続けに吐いた顔はこれだなと思う。婆さんの淀よどみなき口上が電話口で横浜の人の挨拶あいさつを聞くように聞える。

宜よろしければ上あがりましようあがと婆さんがいう。余はすでにロンドンの塵ちりと音をはるかの下界に残して、五重の塔の天辺てっぺんに独坐するような気分がしているのに耳もとの元で「上



りましよう」という催促を受けたから、まだ上があるの  
 かなと不思議に思った。さあ上ろうと同意する。上れば  
 上るほど怪しい心持が起りそうであるから。

四階へ来た時は縹ひょうびょう渺しょうとしてなにごととも知らず嬉うれしか  
 った。嬉しいというよりはどことなく妙であつた。ここ

は屋根裏である。天井を見ると左右は低く中央が高く馬  
 の鬣たてがみのごとき形かたちをしてそのいちばん高い背筋を通し  
 て硝子張りの明あかり取りが着いている。このアチツクに洩も  
 れて来る光線は皆頭の上から真直まっすぐにはいる。そうしてそ  
 の頭の上は硝子一枚を隔てて全世界に通ずる大空であ

る。目に遮さへぎるものは微塵みじんもない。カーライルは自分の経営でこの室を作った。作ってこれを書斎とした。書斎としてここに立籠たてこもった。立籠たてこもってみてはじめてわが計画の非なることを悟った。夏は暑くしておりにくく、冬は寒くしておりにくい。案内者は朗読的にここまで述べて余を顧かえりみた。真丸まんまるな顔の底に笑わらいの影が見える。余は無言むごんのままうなずく。

カーライルはなんのためにこの天に近き一室の経営に苦心したか。彼は彼の文章の示すごとく電光的人であった。彼の癩癬かんぺきは彼の身边を围绕いにようして無遠慮に起る音響

を無心に聞き流して著作に耽<sup>ふけ</sup>るの余裕を与えなかつたと見える。洋琴<sup>ピアノ</sup>の声、犬の声、鶏の声、鸚鵡<sup>おうむ</sup>の声、いつさいの声はことごとく彼の鋭敏なる神経を刺激して懊惱<sup>おうのう</sup>已む能<sup>あた</sup>わざらしめたる極、ついに彼をして天に最も近く人にもつとも遠ざかれる住居をこの四階の天井裏に求めしめたのである。

彼のエイトキン夫人に与えたる書簡にいう「この夏<sup>ぢゆう</sup>中は開<sup>あ</sup>け放ちたる窓より聞<sup>き</sup>ゆる物音に悩<sup>なや</sup>まされ候<sup>そろ</sup>こと一方<sup>ひとかた</sup>ならず色々<sup>いろいろ</sup>修繕も試<sup>こころ</sup>み候<sup>さふら</sup>えども寸毫<sup>すんがう</sup>も利目<sup>きゝめ</sup>これなくそれより篤<sup>とく</sup>と熟考の末家<sup>すゑ</sup>の真上<sup>まうへ</sup>に二十尺四方の部屋を建築

致すこといたに取極めとりき申し候まを。これは壁を二重に致し光線は天井より取り取り風通しは一種の工夫をもつて差支なきやういたす仕掛しかけに候へば出来上りできあが候上さふらふうへはたとひ天下の鶏共一時ときに鬨とぎの声を揚げ候そろとも閉口つかまつらざるつもりに御座候ござさふらふ」

かくのごとく予期せられたる書齋は二千円の費用にてまずまず思いどおりに落成を告げて予期どおりの効果を奏したがこれと同時に思い掛けなき障害がまたも主人公の耳辺に起つた。なるほど洋琴ピアノの音ねもやみ、犬の声もやみ、鶏の声、鸚鵡の声も案のごとく聞えなくなつたが、

下層にいるときは考かんがえだにおよばなかつた寺の鐘、汽車の笛、さてはなんともしれず遠きより来きたる下界の声のろいが呪のろいのごとく彼を追いかけて旧のごとくに彼の神経を苦しめた。

声。英国においてカーライルを苦しめたる声はドイツにおいてシヨペンハウアを苦しめたる声である。シヨペンハウア言う。「カントは活力論あらはを著せり、余はかへつて活力を弔とむらふ文を草せんとす。物を打つ音、物を敲たく音、物の転ころがる音は皆活力の濫用にして余はこれがために日々苦痛にちにちを受くればなり。音響を聞きてなんらの感

をも起さざる多数の人我説わがせつをきかば笑ふべし。されど世に理窟をも感ぜず思想をも感ぜず詩歌しいかをも感ぜず美術をも感ぜざるものあらば、そはまさにこの輩はいなることを忘るるなかれ。彼らの頭腦の組織は麁獷そくわうにして覚さとり鈍にぶきことその原因たるは疑ふべからず「カーライルとシヨペンハウアとは実は十九世紀の好一対である。余がかくのごとく回想しつつあつた時に例の婆さんがどうです下おりましようかと促うながす。

一層を下くだるごとに下界に近づくような心持ちがする。冥想めいそうの皮が剥はげることく感ぜらるる。階段を降り切つて

最下の欄干らんかんに倚よつて通りを眺めた時にはついに依然たる  
 一個の俗人となり了おわつてしまった。案内者は平気な顔を  
 して厨くりやを御覧なさいという。厨は往来よりも下にある。  
 今余が立ちつつある所よりまた五六段の階を下らねばな  
 らぬ。これは今案内をしている婆すまいさんの住居になつてい  
 る。隅すみに大きな竈かまどがある。婆さんは例の朗読調をもつ  
 て「千八百四十四年十月十二日有名なる詩人テニソンが  
 初めてカーライルを訪問した時彼等兩人はこの竈の前に  
 対座して互に烟草たばこを燻くゆらすのみにて二時間のあいだ一言  
 も交えなかつたのであります」という。天上に在つて音

響を厭いといたる彼は地下に入つても沈黙を愛したるものか。

最後に勝手口から庭に案内される。例の四角な平地を見回してみると木らしい木、草らしい草は少しも見えぬ。婆さんの話によると昔は桜もあつた、葡萄ぶどうもあつた。胡桃くるみもあつたそうだ。カーライルの細君はある年二十五錢ばかりの胡桃を得たそうだ。婆さん言う「庭の東南の隅をさる五尺余の地下にはカーライルの愛犬ニロが葬ほうむられております。ニロは千八百六十年二月一日に死にました。墓標も当時は存しておりましたが惜いかなその後取ごとりはら払わ



れました」となかなか精くわしい。

カーライルが麦藁帽むぎわらぼうを阿弥陀あみだに被かぶって寝巻姿のまま啣くわ

ぎせる 逍遥しょうよう

で逍遥したのはこの庭園である。夏の最中もなかには蔭かげ

深き敷石の上にささやかなる天幕テントを張りその下に机をさ

え出して余念もなく述作に従事したのはこの庭園であ

る。星明ほしあきらかなる夜最後の一ぷくをのみ終りたるのち、

彼が空を仰いで「嗚呼あゝ余が最後に汝なんじを見るの時は瞬刻

ののちならん。全能の神が造れる無辺大の劇場、目に入

る無限、手に触ふるる無限、これもまた我が眉目びもくを掠かすめて

去らん。しかして余はつひにそを見るを得ざらん。わが

力を致せるや虚ならず、知らんと欲する<sup>ほっ</sup>や切なり。しかもわが知識はただかくのごとく微なり」と叫んだのもこの庭園である。

余は婆さんの労に酬ゆるために婆さんの<sup>てのひら</sup>掌の上に一片の銀貨を載せた。ありがとうと言う声さえも朗読的であつた。一時間のちロンドンの塵と煤と車馬の音とテムス河<sup>がわ</sup>とはカーライルの家を別世界のごとく遠き方<sup>かた</sup>へと隔てた。

(明治三八・一・一五)





日本文学電子図書館

---

カーライル博物館

著 者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第 1 卷」角川書店  
昭和42年10月10日 8版発行

---



日本文学電子図書館